

IIAS 塾ジュニアセミナーテキスト
(VOL. 02013)

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて
ー日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追うー

(思想・文学分野)

西田幾多郎に学ぶ
～言語以前の世界、「純粹経験」こそ、
人間行動の始源～

公益財団法人国際高等研究所
IIAS 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2016年5月24日開催の第35回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲートの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所 I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。

※本テキストは、2018年春季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて －日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

「西の文化」の彼方に「東の文化」を構想した人物

「西田幾多郎と近代日本」

西田幾多郎は明治3年（1870年）に生まれ、昭和20年（1945年）に亡くなりました。まさに「近代日本」を代表する哲学者であり、思索家でした。西洋哲学への深い造詣のもとに、日本独自の哲学の構築を模索しました。京都帝国大学に赴任してきたのが41歳で、その次の年に出版された『善の研究』は、まさに西田哲学の出発点であるだけでなく、日本人の手になる最初の体系的な哲学書とあってよいでしょう。ここで提出された有名な「純粹経験」の概念を発展させて、「絶対無」や「無の場所」という独特の考えを導き出してゆきます。

「無の哲学」ともいわれる西田哲学は、超難解だとしばしばいわれます。確かに彼の論文はたいへんに読みにくいものです。しかし、「無の哲学」の「無」という観念は、われわれ日本人には論理を超えて直感的にわかることがあります。「神」のような「絶対的な存在」から出発する西洋の思想に対比すれば、われわれには、物事の根底には「無」がある、という思想は比較的なじみやすいでしょう。この講義では、西田哲学の詳細な解説ではなく、その輪郭を論じ、日本思想との連関に触れることができればと思います。

佐伯 啓思 (Keishi SAEKI)

1949年生まれ。京都大学こころの未来研究センター特任教授、京都大学名誉教授。共生文明学、現代文明論現代社会論、社会思想史を研究テーマとし、現代社会を文明論的観点から捉え、政治、経済の分野を中心に広く評論活動をおこなっている。著書に『自由とは何か』（講談社現代新書 2004年）、『日本という「価値」』（NTT出版 2010年）、『現代文明論講義ニヒリズムをめぐる京大生との対話』（ちくま新書 2011年）、『西欧近代を問い直す』（PHP文庫 2014年）、『20世紀とは何だったのか』（PHP文庫 2015年）など多数。



目次

- I 西洋化の時代に生きた西田と漱石の生涯。その課題意識は「日本人の主体性」の保持
- II 「西田哲学」誕生の背後にあるもの
ー西洋化の進展の中での、生き苦しさ、そして「悲しみ」
- III 西洋哲学の不十分性に挑む西田 ー 主客分離と主客一体を巡って
- IV 「純粹経験」の概念を編み出した西田。そして、自己の「無」化に向かう西田

補遺 「西田哲学」から、日本（日本人）のあり方を展望する。

質疑応答

次代を拓く君たちへ ー 佐伯啓思からのメッセージ ー
「はみだし感」「はずれ者感」をバネに真理の探究を。

2016年5月24日開催

第35回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：西田幾多郎と近代日本

講演者：佐伯 啓思（京都大学こころの未来研究センター特任教授、京都大学名誉教授）

Ⅰ 西洋化の時代に生きた西田と漱石の生涯。その課題意識は「主体性」の保持

西田哲学を論じた張本人、西田幾多郎はどのような人物であったか。西田が生まれたのは明治初年、1870（明治3）年で、亡くなったのは1945（昭和20）年の6月10日である。第二次世界大戦が終わる2箇月前であった。したがって、西田は近代日本の歩みのほとんどを体験したことになる。まさに近代日本における問題を自らの人生の問題として引き受けた人と言えるだろう。



西田幾多郎

Public domain
via Wikimedia Commons

戦前の知識人で私の好きな人がもう一人いる。それは夏目漱石であり、西田とどこかで重なるところがある。例えば、漱石は西田の3つ上で、江戸時代の最後、1867（慶応3）年の生れであり、ほぼ同年代である。ただ亡くなるのは、漱石は1916（大正5）年、49歳だったので、だいぶ異なる。だが、漱石が考えていたこと、体験したこと、西田が考えていたことの内容には案外と近いものがある。

とはいえ、大きく異なる点もある。それは留学体験だ。漱石はイギリスに留学する。しかし、英文学を輸入しても意味がない、日本人には日本人の考えがある、西洋人の考えとは根本的に違うと思いはじめ。にもかかわらず、西洋文明がすごい勢いで入ってきて、日本は近代化していく。そして近代化するためには、西洋の知識を身に付けなければならない。漱石がイギリスに留学した時代は、そのような時代であった。

漱石はイギリスに留学したが、西洋に追いつくことはとてもできない、そもそも日本とは次元が違う。追いつこうとすればするほど、日本人は不幸になる。漱石は、そのように考えて帰国し、英文学者を辞めて作家として身を立てる決意をした。

漱石が行った講演で重要なものが幾つかある。一番有名なのは「現代日本の開化」という講演である。この講演が行われたのは1911年、明治の最後の年、明治45年で、それは、西田が『善の研究』を出版したのと同じ年であった。漱石はその講演で、次のようなことを述べている。「日本は文明国になろうとしている。とにかく日本は新しいものを取り入れようと一生懸命あがいている。しかし、それはあくまで外から西洋の文物を受け入れ、模倣し

ようとしているだけである。そういう外面的な開化、つまり外発的開化という外からの影響で日本は近代化を推し進めているが、それでは日本は本当の意味では文明社会にはならない。文明化すればするほど、日本人にとっての精神的な核が失われてしまう。文明開化というのは、一つひとつ着実に自分で確かめながら内発的に発展していくことが重要である。内側から出ていくものが、また新しいものを作り出す。もちろん外側からの刺激は必要であるが、外からのものまねをして追いかけていく、そのような外発的開化ではだめだ。内側から展開してゆき、ゆっくり進んでいく、そのような内発的開化でないと、本当の意味で、日本が文明国になるのは無理だ。」と考えた。

要するに、日本人の精神にとっては、ギリシャ・ローマに端を発する西欧の高度な文明、しかも圧倒的な力を持っている文明を受け入れるのは、相当に恐ろしいことである。しかし、受け入れざるを得ない。ならば、どういう形で、どのような態度で受け入れるべきか。漱石は、そのような問題で悩んでいた。

ところで、時代は、明治から大正へと移る。日本は、日清戦争、日露戦争に勝利し、やがて第一次世界大戦にも戦勝国として名を連ねることとなる。外面的には、あるいは武力の上では世界の一等国になる。当時のグローバリズムの下で世界の第一級の国になってしまう。ところが、それを支える日本人の精神、あるいは価値観は成熟していない。日本人が直面する大問題がここにあった。

漱石は、この大問題に立ち向かうのに、大言壮語するのではなく、日常の生活の中で、自分の生き方、身近な人との接し方などを見つめながら、個人として自立し、精神的な安定を求めることを地道に少しずつ考えていった。それを彼は「自己本位」といった。漱石の小説は、ここから生まれた。こうした生活態度は、当時の日本の知識人が多かれ少なかれ持っていたスタンスであったと思う。

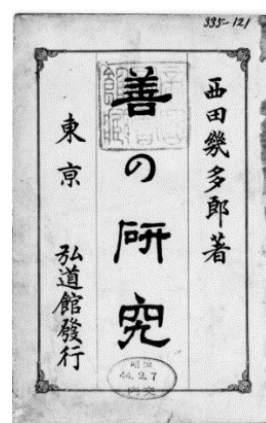
西田は、その思想において漱石と必ずしも同じとは言えなかったし、文学者でもない。しかし、同じような問題に取り組んだ人であった。さりながら、両者は留学経験の有無において大いに違う。漱石はイギリス留学という大きな体験を持ったが、西田は一度も海外留学の経験がない。しかし、それに代わるだけの旺盛な読書力で、西洋哲学、文学、詩、さらに聖書に至るまでありとあらゆる重要な書籍を読んだ。ただ、西田自身が言っているが、体系的に読んだことはない。自分の関心に従ってあれこれ読んでいる。自分にとって大事なものを自分なりに自分のやり方で読んだ、と彼はいう。なかなか面白い発言だと思う。西田は西洋哲学の研究者ではある。西田研究者がよく言うことだが、西田の西洋に対する理解は独特な

もので、通常の理解と随分異なった面がある。例えばヘーゲル¹についても独特の理解をしているようだ。しかし、それは西田にとっては不思議なことではなく、普通のことだったであろう。西洋のものの考え方を借りて自分の考え方を切り拓いていったということである。西田は哲学研究者ではなく、自身が哲学者であった。

II 「西田哲学」誕生の背後にあるもの

－西洋化の進展の中での、生き息苦しさ、そして「悲しみ」－

西田の主著は、『善の研究』である。それを京都大学に着任した次の年に書いている。当時 40 歳であった。彼がまとまった書を書いたのはこれくらいである。京都へ来る前に、彼は、学習院大学で教えているが、教壇に立ったのは 1 年ぐらいで、まともな就職とはいえない。しかも、仕事以外は無一文であった。輝かしい名声を博しているが、それは後世のことで、学生時代から随分と苦勞している。生まれは石川県の田舎（旧加賀国河北郡森村。現在：かほく市森）で、第四高等中学校に進学するが中退している。その後、紆余曲折を経て東京大学に行くが、非正規の学生であった。今でいう研究生として研究の場を確保したのだが、正規の学生との待遇の差に非常な屈辱感を味わった。



西田幾多郎『善の研究』
(弘道館 1911 年)
国立国会図書館デジタル
コレクションより

家庭的にも問題があった。先ず父親との関係が非常に悪かった。父親もまた強烈な人であったと言う。結婚したが、父親に大反対され離婚を余儀なくされる。父親の死後同じ女性と再婚し、8 人の子供を設けた。しかし、5 人に先立たれるという不幸に見舞われる。京都に赴任してから奥さんが倒れ、数年間寝たきりになり、その看病に明け暮れる。そういった意味で、彼の人生は非常につらいものであった。

西田哲学において、彼の苦悩の人生と彼の哲学がどこかで共鳴し、重なり合った。彼は、哲学は「悲しみから始まる」と言っている。人生の悲しみというものが西田哲学に影を落と

¹ Georg Wilhelm Friedrich Hegel (1770- 1831) は、ドイツの哲学者である。ヨハン・ゴットリーブ・フイヒテ、フリードリヒ・シェリングと並んで、ドイツ観念論を代表する思想家である。18 世紀後半から 19 世紀初頭の時代を生き、領邦分立の状態からナポレオンの侵攻を受けてドイツ統一へと向かい始める転換期を歩んだ。優れた論理性から現代の哲学研究も含め、後世にも多大な影響を与えた。観念論哲学及び弁証法的論理学における業績のほか、近代国家の理論的基礎付けなど政治哲学における業績も有名である。認識論、自然哲学、歴史哲学、美学、宗教哲学、哲学史研究に至るまで、哲学のあらゆる分野を網羅的に論じた。ヘーゲルはドイツ観念論哲学の完成者であり、大陸哲学における近代哲学と現代哲学の分水嶺として位置づけられることも多い。

している。そういうことと、近代知識人の持っている独特の悲しみ、あるいは葛藤というものとどこかで重なっている。西田は生活上の苦難を哲学に高め、哲学の中に人生の悲しみを落とし込む。それが自分の救済になる、自分の人生を理解することになる、自分の人生を豊かなものにする。できるなら、その苦しい人生の中で自分を救済したい。そのような西田の人生経験によって彼の哲学は確立していったのではないかと思う。それは、多かれ少なかれ、日本の近代の知識人が感じていたことではないかと思う。

その日常生活の中で、西田ほど内面的苦悩を経験し悲惨な人生を送ったとは思わないが、漱石も幸福感を全く感じていない。奥さんとの仲も、周りの知人や親せきともうまくいかなかった。そういう漱石自身の人生の中での迷い、苦しみ、そういうものを昇華するために文学に勤しんだ。文学の中でそのことの意味を確かめようとする。小説の中で自分の内面を描いて、人間の奥底を追求し、人間の心理というものを知る。知ることによって自分の苦しみのよってくるところを理解する。そのようなところがあつたのだらうと思う。

西洋哲学を学んだ西田にも、大きな苦悩と葛藤があつた。西洋から哲学や文学など多様な知識が入って来る。それは知らなければいけないが、それを勉強しようとする自分自身が失われていく。その結果、自分の生活が精神的に非常に不安定になる。日本の知識人、あるいは学者の日常生活は、多くがそのような不安定な事態に見舞われ、北村透谷や芥川龍之介などの文学者などでは自殺する人も出てくる。しかし、哲学者などの学者にはそのような悲痛な事態は見られない。それがかえって西田哲学を特異なものにしている。

III 西洋哲学の不十分性に挑む西田 — 主客分離と主客一体を巡って

西田は、独自に、ギリシャから始まって 20 世紀に至るまでの、西洋の哲学者を深く研究し、また多くの文学作品を読んだ。にもかかわらず、西田にとっては西洋哲学は十分ではない、これはもっと突き詰められなければならないと、いうことであつた。

少し雑駁に言うと、西洋哲学というものは、こちら側に認識する主体がある。向こう側に認識される対象がある。ここに私がいて、ここに机がある。私がこの机を机として認識している。西洋の考え方はこういうものである。主体がいて、主体が認識する対象がある。西洋の科学や学問は、その構図を前提にして成り立っている。しかし、本当にそう言えるのか。どうして私はこういうものだ、私というものが存在するのかと言えるのか。そう単純に言えるのか。ここに私がいて、ここに机があると言う前に、議論し、認識しなければならない前提のようなものがあるのではないのか。こう疑問を呈する。もっと根本的な問題があるだろうと言うわけである。

実は、西洋哲学自身もその当時、同じような問題を抱えていて、例えば、ハイデッガー²などが同じようなことを言い出す。同じ時期に、西田は西田なりに、認識主体に関して思考を深めていく。西田が出発点にしたのは「経験」ということで、『善の研究』の最初に、経験するというのは事実をそのままに知ることであるという。要するに、事実に従って普通に経験しているところから出発するのであって、知性によって分別を加えないところにおいて真の経験がでてくる。経験するというのは事実そのままを受け止めること、全く自己の細工を捨てて事実に従って知ることである。これを純粹経験と言う。経験とはいったい何なのか。どのような性質のものなのか。経験するのは事実そのものを知ることというが、経験と事実の違いは何なのか。事実とはいったい何なのか。こういうことを西田は問い詰めている。これは何を言わんとしているかは分かるのだが、非常に難解である。



Martin Heidegger
Willy Pragher, CC BY-SA 3.0
via Wikimedia Commons

まず経験するということについてだが、我々は経験するというをどのように用いるかという、例えば今日自分にとって大変に良いことがあって、それを経験したという。その時、過去に何かを経験したと言うときに、既に過去に経験した私というのは分離されている。昨日私はこういう経験をしましたと言ったときに、向こう側に経験された事実を置き、こちら側に経験した自分を置く。しかし西田は、経験の概念はそのようなものではなく、経験するというのは事実そのものと自己が一体となることであるという。目の前で演奏が始まろうとする。音が鳴ろうとする。聞こえるか聞こえないか自分でも分からない。聞き取ったかどうか分からない。その時、音と自己が一体となっている。そういう状態が経験であると言う。花を見て、花かどうか分からない。何か白い綺麗なものがあつたと思った時、それが経験であると言う。これが本当の経験であり、純粹経験である。この純粹経験は西田の独特の概念である。それからすれば、「私」と「事実」を分離してしまう西洋哲学は「経験」を分析できない。

² Martin Heidegger (1889 - 1976) は、ドイツの哲学者。フライブルク大学入学当初はキリスト教神学を研究し、フランツ・ブレンターノや現象学のフッサールの他、ライプニッツ、カント、そしてヘーゲルなどのドイツ観念論やキェルケゴールやニーチェらの実存主義に強い影響を受け、アリストテレスやヘラクレイトスなどの古代ギリシア哲学の解釈などを通じて独自の存在論哲学を展開した。1927年の主著『存在と時間』で存在論的解釈学により伝統的な形而上学の解体を試み、「存在の問い(die Seinsfrage)」を新しく打ち立てる事にその努力が向けられた。20世紀大陸哲学の潮流における最も重要な哲学者の一人とされる。

IV 「純粹経験」の概念を編み出した西田。そして、自己の「無」化に向かう西田

西洋哲学というのは、私（主体）の向こう側に世界がある、これを正確に分析しよう、実験しよう、調べよう、というものであり、ここに西洋の科学が成立する。花の成分が分析できれば次に品種改良して、もっときれいな花を咲かせることができる。こうした論理は、こちらの世界から切り離されたところにある。しかし、本当は世界と私は分離してあるのではなく、世界が現れるところに主体がある。そこには人間の精神があり、人間の生がある。それは世界と結びついている。我々は既にそういう世界に生きている。西田は、そういう一番重要なところに一度戻らなければならないと言っている。

我々が何かを知るということは、そこで我々の理性が働いているだけではなく、何かに向けて行動しようとする意欲、身体の動き、感覚などが一体となったものである。さらにそこに情緒、あるいは感情も加わる。人間は何か物事を知りたくなる、あるいは何かをしたくなる、何か美しいものを見たくなる。そうした情緒を駆り立てられる時、その元となっている根底に「純粹経験」がある。そこが一番大事だと言う。そういうものがまずあって、そこから人間はどんな行動をしようか、どんなことを知りたいかと考えて活動を展開する。後になって、その経験を反省して、私はこういう経験をしたという話になる。反省する前のこの経験、これが純粹経験である。西田は、人間が言葉を発する前、言葉の前段階、花がきれいだとか言う言葉を発する前の段階、そもそも花かどうかよく分からない段階の経験のことを純粹経験と言う。

人間が何かを知るというのは、根本的に何かがあると感じ、まだ名前を付けることができない段階である。名を付けることができないもので、何か大事なものがある。言葉が出てしまった時には大事なものが抜け落ちてしまう。言葉にならないものが大事である。そして日本人には言葉にならないものが大事だという心がある。例えば、桜の花を見たら美しいと言う。桜の花を客観的に見て美しいと言うのではない。桜の花が美しいと言うときに、一気に咲いて散っていく、そのように人生が送れたらいいという、そこに口にはならない思いを託している。そこでは自分が桜の花の中に入り込んでいる。人々は、伝統的日本文化の中で、そうしたことを前提にして桜の花を見ている。あるいは感じている。桜の花がきれいだと言葉に出して言ったとたん大事なものを失ってしまうと考える。

ところがやっかいなのは、それを言うためにも言葉を使うしかない。言葉で言うしかない。西田哲学の問題はまさにここにあった。西欧文化もそのことに気づいていたのかも知れないが、問題にしなかった。西欧文化は、初めに言葉があるところから出発する。ものには名前がある、ものに名前を付けることができるところから出発する。この世のものに全て言葉を付し、そうすることによって世界は理解することができるとする。それが西欧文化の根底にある。言葉の世界、論理の世界、これこそが西洋哲学の世界である。

今日の日本人は西洋哲学に余りにもなじんでしまった。それはそれでよいのだが、それは日本人にとって本当に幸せなのだろうか。何か始まる一瞬、何か風がざわざわする。音がする。ざわざわと音が聞こえる。何か非常に不安である。自分を不安にさせるものがある。日本人はそうした強い感受性を持っているのではないか。そうした感受性を研ぎ澄ますには「もの」の前でできるだけ謙虚になり、自分を無にしなければならない。それを徹底しようとしたのが西田哲学であったのではないか。

補遺 「西田哲学」から、日本（日本人）のあり方を展望する。

2014年7月11日開催

第12回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：和魂洋才の末路

講演者：佐伯啓思（京都大学こころの未来センター特任教授、京都大学名誉教授）

－ 講演録（抜粋）－

西洋が、近代社会の原理として生み出した「合理的な科学」、「自由な個人」、「個人の権利」、それらに基づく「民主主義」、こうした概念は果たして本当に普遍的なものなのだろうか。これらは西洋のコンテクストの中で、西洋文化の中でしか生まれなかったものなのではないか。今日、我々日本人にとってはそういうことが問題になってきている。こうした問いを哲学の問題として真正面から考えたのが、西田幾多郎である。西田哲学は難解なものであるが、西田が企図したことはよく分かるのではないだろうか。

西田は、あるところで、「和魂洋才」、西田の言葉では「和魂漢才」だが、ともかくいわゆる「和魂洋才」は駄目だと言っている。どうしてか。ヨーロッパの近代科学的精神、そして日本の近代化を作り上げた学問や技術は、すべて西洋文化の中で生まれてきたものである。西洋文化を知らないとこれを理解することはできない。それを簡単に日本に持ち込んでも駄目だ。けれども、勉強してよく知っておかなければならない。知った上で、日本の文化なり、日本の思想なり、日本人の精神なりを基礎にして、日本の哲学、日本の科学を作る。そのように考えないと駄目である、というのが西田の基本的な考えだ。

西田は、西洋哲学に関する大変な量の書物を読みこなした上で、合理的な科学などは西洋の文化と不可分だと考えている。一般的には、論理というものは普遍的で、どこに行っても通じるものだと考えられているが、西田は、西洋の論理は西洋の文化の中でしか成立しなかった、日本の論理はそれとは違うと言っている。だから、西田の視点に立つと、「私は人間である」という自明のことであっても、そう簡単には言えなくなってしまう。

彼が京都大学に来たのは40歳のときであるが、それまで彼にはほとんど業績がなかった。

京都大学に来た次の年に、有名な『善の研究』を発売する。そこで「純粹経験」という独特の言葉を紡ぎ出す。では「純粹経験」とは何か。これはなかなか難しい。

ところで、西洋哲学、いわゆる近代哲学はデカルト³に始まった。デカルトは有名な「我思うゆえに我あり」、いわゆる「コギト・エルゴ・スム」という言葉を作った。彼は、飛び抜けた秀才で、多くの本を読んだが、どうも納得できない。そこで本をすべて捨ててヨーロッパ中を旅行する。時は17世紀、ヨーロッパは宗教戦争のただ中であつた。そこで従軍しつつ悲惨な出来事ばかり見聞し、自分が勉強してきたことは何の意味があつたのか、自分は何も知ってないと、絶望感に陥る。

彼はあらゆることを信じることができなくなる。その時、田舎の農家で暖炉の火を見ていた時にふと思いつく。「あ、そうか」と。何も自分は信じることができない。しかし、すべてを疑っている自分がある。すべてを疑っている自分があることだけは確かだ。それは絶対に疑いようのない事実である。そこで「我思うゆえに我あり」、「我疑うゆえに我あり」となる。

この考え方ができ上がると、「我あり」というとき、「我」というものが絶対的に存在することになる。世の中のものはずべて疑わしく、本当に存在するかどうか分からない。だが、「我」だけはある。その「我」は世界から独立して、世界を超越している「我」である。

この「我」は誰かという、別にフランス語を喋るデカルトという名の男ではない。「我」とは一つの精神である。理性を持ち、推論する、ものを考える抽象的な「我」である。それはこの世の中を超えて、自分の体つきや、足が速いとか遅いとか、そのような具体的で身体的なことに関係なく、世界から離れて超然として存在する。

そういう「我」というものを西洋はまず立てて、その「我」であるところの精神・理性から始まり、精神・理性がこの世界を対象として認識する。世界の中には一つの秩序があり、それを精神・理性が合理的なものとして捕らえる。そこから近代科学が始まる。合理主義が始まる。その考え方が社会に応用されて社会科学も始まる、ということになる。

この考え方は、西洋の文化に、少なくともキリスト教の文化に非常に密接に関係している。キリスト教ではまず絶対者としての神がいて、神が世界を創造する。神は世界から超越している。神が世界を作ったと同時に、世界を完全なものとしている。人間は神ではない、神の創造物である。

³ René Descartes (1596 - 1650) は、フランス生まれの哲学者、数学者。合理主義哲学の祖であり、近世哲学の祖として知られる。考える主体としての自己（精神）とその存在を定式化した「我思う、ゆえに我あり」は哲学史上でもっとも有名な命題の1つである。そしてこの命題は、当時の保守的思想であつたスコラ哲学の教えであるところの「信仰」による真理の獲得ではなく、人間の持つ「自然の光（理性）」を用いて真理を探求していこうとする近代哲学の出発点を簡潔に表現している。デカルトが「近代哲学の父」と称される所以である。

人間の肉体は死んでいく。しかし、精神・理性は神に近づくことができる。神にはなれないが、霊的、精神的存在として神に近づくことはできる。精神・理性は、この世界から超越して、この世界を分析することができる。もし神がこの世界を正しくある秩序をもって作っていたとすれば、人間は、精神・理性によってそれを分析することができる。これが西洋の思想の核にあると言ってよい。信念である。西洋の合理主義とはこういうものである。もちろん西洋思想にもいろいろな面があり、それに反対する人たちもいる。非合理主義も神秘主義もあるが、メインストリームではない。ともかく、世界についてのこの普遍的理解は、日本人であろうと、インド人であろうと、中国人であろうと皆理解できる、という話になる。

しかし、西田はこういう考え方はしない、こういう考え方はまだ十分ではないと考える。デカルトが火を見て、「あ、そうか」と思った時に、「我思う」など、そのようなことをデカルトは考えているはずはない。我はその時にはなかったはずだ。そこにあるのは火を見て、「あ、そうか」と思った、火と一体になった、その経験があるだけであると、西田なら言うだろう。その経験だけが根本にあって、後から「その時そう言えば、あの時に俺はあのよう考えた」、「あの時このように思った」と、そこで初めて俺は考えたという俺が出てくる。これがデカルトの言う「我」である。それは後から反省して出てくるものである。根源的にそのような私のようなものがあって、私が暖炉の前に来て何か思いついたのではない。むしろ火があって火に魅入られた時に、自分が何かを感じた、そういう経験だけが根本にある、それだけが根本的な事実なのだと言う、そういうものを「純粹経験」と西田は言った。すべてはそこから説明できるはずだというのが西田哲学の出発点である。

この西田の考え方は西洋の考え方と全く違う。最初からこの世の中を超越している私がいるのではない。火に出会った私がいて、その次に暖炉から動いて行って、吹雪の吹いている外へ出て、「あ、寒いな」と思う私がいる。戦場に行って、バタバタ人が死ぬのを見て、その悲惨さを感じ、「大変なことが起こっている」と感じる私がいる。そのような経験が次々とつながっていく。経験だけが次から次へとつながっていく。そういう経験のつながりが現実を作っている、と言う。

人間は常に経験をしながら、経験の中で動いていくもので、この世界の外に出て、世界を外から眺める主体などというものを立てることはできない。人間は常に世界の中であって、何かを経験をしながら、その経験に突き動かされながらさまざまなことを感じて生きている。その経験に突き動かされてまた次の行動をする。そういう過程だけがこの世の中を作っている、と西田は考える。

つまり、西田は、超越的な「私」、主体は存在しないと考える。それはせいぜい後から反省的に作り出される。したがって、科学的に見て、あるいは客観的に見て、抽象的に正しいとか間違っていると簡単には言えない。そのような考え方は、西洋の文化的背景、キリスト教やギリシャ哲学などを前提にして出てきたのだと言う。日本には、少なくともキリスト教

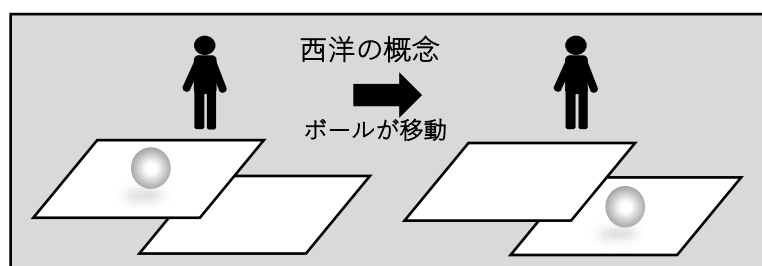
的な神の概念はない。日本人はむしろ、我々はいつも歴史の中に、この世の中に生まれ落ち、この世の中から去っていく、それがどこから来てどこに行くのか、それは分からない。しかし我々はこの世の中で生きる、この世の中で生活をして、そして去っていく。日本人は、一般にそのような考え方をしている。

西洋思想の背後には、絶対者としての神が想定され、神がこの世の中を完璧なものとして作っているはずだ、という考えがある。人間は精神的、理性的存在としてはじめて神の意図を多少は理解できる。するとこの考えを延長すれば、この世の中を完全なものを作り変えることができるはずだ、と考える。そこに、世の中は永遠に進歩する、人間は科学技術によって進歩を達成できる、という考え方が出てくる。これが歴史だ。歴史は進歩するはずだ、という考えが出てくる。

しかし、西田のように考えると、歴史が進歩するという発想は出てこない。我々は、たまたま、今この 21 世紀の初めの 2010 年代にここで出会っているだけである。偶然に出会っているだけである。そのような出会いは次の瞬間には消えてしまうと考える。だから日本人の歴史についての考え方は、物事は生々流転していく。生まれては滅していく、それが生々流転していくと考える。歴史というものは時の勢いである。時の勢いによって歴史は動いている。それを外から眺める人はいない。外からその歴史を作ることもできない。すべてその時の勢いの中で、流されていたり、抗っていたりする。いずれにしてもその時勢の中で、人間は生活し、生存している。さまざまな力がぶつかり合ってまた次の流れができていく。これが日本人の考え方であろう。結局、我々はどこからか来てどこかへ去っていく。そのどこかというのはよく分からない。よく分からないけれど、強いて言えば、何もないところ、「無」と言ってい。根底的には、我々は「無」からこの世の中に生まれ出て、また「無」に戻っていく、と日本人は考える。

例えば、四角い紙があるとする。その上にボールが乗っていると。こちらにもう 1 つ

同じような紙があるとする。我々が向こう側に立って、そのボールが紙の上に乗っているボールを見ている。西洋の考え方では、ボールが、仮にこちらの別の紙に移動したとすると、あく

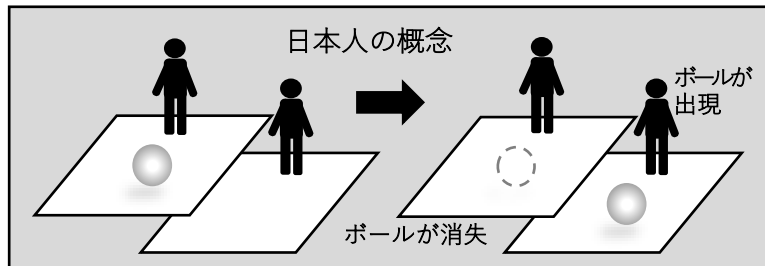


©2023 Atelier HAL-o

までボールが移動したと見る。というのは、我々は向こう側にいて、そのボールの移動するのを見ているからだ。ボールは 1 つの実体であって、この実体としてのボールが、あちらからこちらに移動したと見る。だからボールは運動している。この運動の法則はいったいどういうことかと考える、力学的に言えば、これは秒速どれくらいで動いているのか、そんな話

もできる。

しかし、もし我々とボールがこの白い紙の上に一緒に乗っているとして、我々がそのボールに触れているとしたらどうなるか。我々はあくまで一枚の紙の上にいる。すると、ボールが動いていく



©2023 Atelier HAL'o

と、ボールがいつの間にか消えていることになる。もしもう一つの紙の上に我々が乗っているとしたら、どこからかボールがやって来てボールに出会うことになる。ボールが運動したとは感じない。もしこの紙が白い紙ではなくて透明なガラスだったら、いつの間にかボールが無の中に消えてしまった、いつの間にか何も無いところからボールが出てきた、そういう考え方になる。西田哲学の根底にあるのはそういう考え方である。

西洋思想のように、神という絶対者の下で、人間がいわば神の代理として、この世の中を良くすることができると思えば、歴史はユートピアに向けて一定の方向に動いていくという「進歩主義」が出てくる。しかし、日本思想はそういう風な考え方はしない。すべてが「無」から出て「無」に帰っていくと考える。

そうすると、我々の中にあるのは根本的には「無」であり、その「無」がすべてを支えている、すべてを受け止めている。その中で、たまたま、この瞬間に出遭う経験がつながっていくだけで、それを我々は「一期一会」などと言う。だからこそ、この一瞬の出会いを大切にす。

このようなところから出てくる態度は、どういうものかと言うと、一つは『方丈記⁴』の冒頭にもあるように、すべては川の流れのように生々流転の流れであり、「無」から出てきてまた「無」に戻っていくという感覚である。世の中がどのように流れていくのかよく分からない、別に目的も何もない。ただ動いていくのみである。そこでは、この川の流れを人間がコントロールすることなどできない。どこに行くのか分からない。どこに行くのか分からないが、それを運命として受け止める。一種の運命感である。大きな流れを一つの運命として受け止めるということになる。

例えば、たまたま我々は、70年前の戦争の時代ではなく、この平成の平和な時代に生まれた。戦争の時代に生まれていたら、こんなところでこのようなのんきな話はしてはいない。

⁴ 鴨長明（かものちょうめい：1152-1216）による鎌倉時代の随筆。日本中世文学の代表的な随筆とされ、約100年後の『徒然草』、『枕草子』とあわせて「日本三大随筆」とも呼ばれる。長明は晩年、京の郊外・日野山（京都市伏見区日野町）に一丈四方（方丈）の狭い庵を結び隠棲した。彼が庵内から当時の世間を観察し、書き記した記録であることから「方丈記」と自ら名づけた。

しかし、そんなことを言っても仕方がない。この状態で生まれたことを一つの運命として引き受けなければならない。戦争の時に生まれた人は戦争の時に生まれたことを運命として引き受けなければならなかった。偶然を運命として引き受ける。そして、その運命として引き受けることも一つの覚悟である。

西洋思想は人間の本質的に自由であるというところから出発するが、日本思想は、人間は生まれながらに自由だとか、人間は平等だというようなところから出発しない。本当はこんなふうになりたい、本当はこんなふうに生きたい、他の人を見たら自由にしているではないか、というような事はもちろんあるだろうし、多少の改善はできるだろうが、根本的に人間の運命を大きく変えることはできない。そういうものは引き受けないと仕方がない。それは覚悟のいることである。同時にここには諦念がある。そこから日本人には、諦念と覚悟をもって、ある種の運命を自分のものとし、自分の生を全うする、そこに自分の使命を見出していく、そういう考え方が強い。

それが日本人の精神性を作ってきたものだと言えよう。そのためには、我が我が、俺が俺が、と言わない。俺はこうしたいんだ、俺はこうなりたいたんだ、と簡単には言えない。私というものを一度「無」にしなければならない。経験をそのまま受け止めるために、しかも経験をできるだけ豊かに受け止めるためには、一度自我というものを殺さなければならない。そこに「無私」とか、「無我」とか、「無心」とか、神道的に言えば「真っ白な心」や「清明心」とか、儒教的に言えば「誠」とか、そういう観念ができて、日本人の精神性を形作ってきた。西田哲学はその上に成り立っている。したがって西田哲学は、日本人が生きていく上での、こうしたある種の価値、精神的な態度を前提にして、日本人の論理を作っている。

ところで、「私は佐伯である」という言い方は西洋の論理からすると不思議でも何でもない。私は私であるというセルフアイデンティティが基本になっている。主体としての私は世界から離れていて、そのものとして抽象的に存在している。私は私でいい。しかし、西田はそうは考えない。私をいっぺん捨てなければいけない。私をいっぺん捨てて、経験に即して、経験の場に身を置いて物事と一緒にあって、そこにある物と一体になって、物事を豊かに経験してもう一度そこから私というものが出てくる。したがって「私は私でなくして私である」これが真理だ、これが日本の論理であると言う。

今日、我々はこうした西田哲学や日本思想をまともに見ようとしなない。しかし、何か我々はそういうことを知っておれば、グローバリズムの下で、経済競争をし、資金獲得競争をし、金をばらまく、それで世界がもっと豊かになる。もっと世界中が民主化すれば世界が幸せになる、産業技術がすべての問題を解決する、と言うような単純なことにとらわれなくても済むのではないか。日本は日本のあり方、日本人の生き方というものを、もう少しまじめに考えていけば、それを基礎にした経済のあり方や、科学のあり方、技術のあり方というものを

考えることができるのではないか。

現代のこの産業技術文明がこのまま加速していくと、どうにもならないところまでいくだろう。しかし、それを止めるメカニズムはどこにもない。思想的にいうと、近代思想は個人の自由を極大化する方向に向かっていった。個人の物的な幸福を最大化しようとする。それがグローバルシステムを作り上げ、グローバルな経済競争や成長競争を行ってしまう。これを簡単に逆転させる方向は簡単には見当たらない。

ただ、このようなことを意識的に行ったのはアメリカである。戦後のアメリカ、特に1980年代のレーガノミクス以来、相当意図的にグローバリズムを作り出し、グローバリズムの中でアメリカが覇権をとれるようなシステムを作ってきた。アメリカ自身も若干のとまどいがあるだろうが、アメリカはグローバルなシステムの中で利益を得ることができる。なぜなら市場競争にしろ、個人の能力主義にしろ、成果主義にしろ、自由民主主義にしろ、これらはもともとアメリカが打ち出した価値であり、アメリカはこのような価値を正義として掲げており、すると、世界に対して、少なくとも思想的な覇権を取ることができるからだ。

日本人は、本当にグローバル競争を、成果主義的な競争を、不安定な金融中心の経済を求めているのであろうか。恐らくそうではないのではないだろう。とは言え、こういうことから簡単に降りるわけにもいかない。

明治以降、西田哲学や京都学派⁵あたりまでは、少なくとも知識人はそういう問題意識を持っていたし、ある程度国民的な共感も得ていた。つまり日本は西洋に学んで近代化しなければならず、西洋列強並みに強くなしないと駄目だ。この大競争に勝たねばならない。しかしそのことが本当に日本として、日本人として望んでいるものなのか。日本人の持っている精神性のようなものを失うのではないか。そういう危機意識が明治から昭和の初めころまではあった。漱石の例を持ち出すまでもなく、知識人はそのような問題関心を持っていた。ところが、戦後はそういう関心がなくなったように見える。問題提起をする人がいなくなった。そういう問題が出せなくなってしまった。そのことこそが一番の問題だと思う。

日本が戦争に入る前、戦前は帝国主義の時代であり、ある意味でグローバリズムのただ中を生きた。日本も帝国主義的グローバリズムの競争に負けじと、大陸に進出した。そうして

⁵ 一般に西田幾多郎と田邊元および彼らに師事した哲学者たちが形成した哲学の学派のことを指すが、京都大学人文科学研究所を中心とした学際的な研究を特色とした一派も、京都学派、あるいは哲学の京都学派と区別するために、新・京都学派とも称する。その他にも様々な学問分野において『京都学派』と呼ばれるグループが存在している。その詳細な定義は国や研究者によって異なり、未だに世界各国で盛んな研究の対象となっている。主なメンバーとして、西田幾多郎、田邊元、波多野精一、朝永三十郎、和辻哲郎、三木清、西谷啓治、久松真一、武内義範、土井虎賀壽・下村寅太郎・上田閑照、大橋良介らが挙げられ、また左派としては三木清以外に戸坂潤、中井正一、久野収らが挙げられる。とりわけ中井は後述する京都学派（人文研）の桑原武夫や、京都学派（近代経済学）の青山秀夫とも懇意であった。また桑原は父親が京大文学部教授であったこともあって西田とも若い頃から接していたという。

西洋と完全に衝突し戦争になった。今日、このような大戦は起きないが、構図としては同じである。似たような経済戦争が起き、領土紛争が起き、さまざまな軍事的けん制をしているという意味では、戦前の時代と非常に似た状況になっている。

そのような状況の中で、西田哲学や、京都学派の人たちは、西洋と同じような論理でこの時代状況に入っては駄目だと主張した。日本は、日本的な価値、日本的な精神をもう一度呼び起こして、その思想の上に、日本の立場を作らないといけないと主張した。

それと同じようなことが今日求められている。西洋発の近代主義の論理は行き詰まりつつある。特にアメリカ主導のグローバル競争は、行きつくところまでできてしまっている。日本は、明らかにそれと違う別の価値観を本当は持っているはずである。だから一番良いのは、そういう日本の持っている価値観を我々は心の中に抱いて事に対処することではなかろうか。

日本語の例えば「心」と言葉は、英語にはうまく置き換えることができない。スピリットでもないし、ソウルとも少し違う。ましてや「もののあわれ、などという言葉は英語にならない。日本人を感じる多くの言葉はなかなか英語にならない。「無常、という言葉もそれにピッタリ合う英語はない。そもそも「無」という言葉が英語にはない。「ナッシングネス」は、やはり「シング」がまずあって、それを否定しているので、少し違う。日本人は、西洋とは少し違う独特の世界観、価値観を持っている。

けれども、同時に、西洋的なものをここまで受け入れたのは日本だけである。西洋的なものの考え方も我々は理解している。それを理解した上で、西洋的なものを克服できるような何か「無」というものをベースにした価値観を世界に発信することができればと思う。しかしそれを実際に行うには政治力が要る。日本の学問はほとんど輸入学問であり、社会科学などは、ほぼ 99%がアメリカからの輸入学問であり、アメリカで売れているものを日本に紹介するばかりになっている。そういう現状を少しでも変えていくところから始めなければならない。

質疑応答

- Q1 独創的と言われる「西田哲学」の独創性は、どこにあるのか。
- Q2 「人生の意味」「人間の幸福」を、「西田哲学」はどう捉えているのか。
- Q3 言葉中心の西洋哲学とは異なる「西田哲学」は、どのように伝承されていくのか。
- Q4 日本の風土は、「西田哲学」にどのように反映されているのか。

Q1 独創的と言われる「西田哲学」の独創性は、どこにあるのか。

西田幾多郎は、独創的な哲学を構築しようとしたとも言われていますが、その独創性は、どこにあったのでしょうか。

(佐伯)

西洋哲学の基本的な構造が、あくまで、認識し思考する「主体」と、対象である世界や自然などの「客体」の分離に基づいているのに対して、西田は、この「分離」のさらに以前の状態まで戻ろうとした。それが「純粹経験」である。20世紀になると、西洋でも、ウィリアム・ジェームズやベルグソンといった哲学者が似たような概念を打ち出すが、西田の場合には、この「純粹経験」をさらに深めて、「無の場所」だとか「絶対無」という概念を打ちたてることになる。「主体」の内をのぞき込んで、その底に「無」を見出すという思考は、仏教の禅などにも通じる。こうして、禅に通じるような、つまり日本的な思想を哲学と結びつけようとしたという点で、西田哲学は他に類をみない独特のものであろう。

Q2 「人生の意味」「人間の幸福」を、「西田哲学」はどう捉えているのか。

西田幾多郎の思想から見て、実生活に即して、その人生の意味とか人間の幸福については、どのように考えられるのでしょうか。

(佐伯)

西田の実人生は、かなり苦悩の連続であり、本人もそう述懐している。その苦痛を背負った自分のこころの中を覗き、その奥底に、揺るぎない「絶対無」を発見した。それを哲学の言葉で表現しようとした。西田は、哲学は、高尚な、誰にも理解できないような理論や思索を振りかざすものではなくて、我々の日常生活に即したものであり、日常の経験をすくい取るものでなければならない、と言っている。(もともと、その割に西田哲学はたいへんに難解であるが) また、哲学は、その人の人生と深く関わったものでなければならない、ということも言っている。西田にとって、彼の哲学は、何か哲学上の真理(大事な考え)に辿りつくことによって、そのこと自体に幸福を感じ取れたのではないか、と思う。

Q3 言葉中心の西洋哲学とは異なる「西田哲学」は、どのように伝承されていくのか。

西田哲学の理解の仕方、伝え方の視点から考えて、西洋哲学においては言葉により根本の

ところを伝えることができる。それを基盤とする科学技術は、その典型であろうと思う。その一方で、東洋哲学においては、その根本に宗教的背景もあり、西洋哲学と同様には扱えないのではないかと思う。西田哲学において、その考えを伝え、共有することはできるのでしょうか。

(佐伯)

難しいが大事な問題だと思う。西洋思想の強みは、論理的な言葉で表現されている点にあり、科学が西洋で成立した理由もそこにある。論理的言葉で体系的に表現すれば、誰にでも伝わる。だから、西洋哲学や科学は、普遍性をもって世界中に広がっていった。しかし、確かに、日本思想や日本的な精神は、論理的な言葉を重視しない。本居宣長のような人は、日本人の考え方や感じ方の基本は「もののあわれ」を感じる心だ、というのが、確かに、そういうものは論理的言葉にはならない。芭蕉の俳句も論理的ではない。日本思想には、言葉になる以前の感覚や自然との一体感などを本質的だとみなす傾向が強い。

西田や、西田の友人の鈴木大拙（アメリカにも長く住んだ仏教者）などは、それでは困るというので、日本的思想（例えば「無」の思想）をできるだけ論理的な言語で表現しようとした。しかし、それは通常の、西洋型の論理的言語とは異なっている。それをそのまま西洋人に伝えるのは、確かに難しいかもしれない。しかし、西洋人、特に知識人は、論理的な言葉では表現できない日本の文化のあり方に興味は持つし、日本人の美的感受性にも関心をもつ。禅（ゼン）も英語になっている。西田哲学も翻訳されており、関心を持つ学者も多い。こうしたことを積み上げていけば、西洋でも理解は不可能ではないと思う。

Q4 日本の風土は、「西田哲学」にどのように反映されているのか。

西田哲学には、「無」の思想があったということですが、その起源を尋ねると、日本の自然環境、あるいは生活環境といったものがベースとなって、そこから自ずから生成して来たのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。農耕民族と狩猟民族ではその心性において自ずから違いがあるように思うのですが。

(佐伯)

あまり物事を簡単に「風土」に解消するのは危険であるが、しかし、日本人のものの考え方や宗教観に、日本の風土が無関係とも思えない。和辻哲郎が述べたように、日本のモンスーン型風土には農耕が適しており、農耕は、自然と人間を一体（もしくは循環構造）として捉える傾向が強い。そうすると、人間は自然を超越して、それを自分の思うままに作り変える、という発想は出にくい。また、自然そのものが、何かによって作り出された、というより、いつのまにか生成し変化してゆくものだ、という意識が強い。人間自身も、自然のなかでどこからか生まれてきて、またどこかへ去ってゆく、という考えに傾く。「無」からでてもまた「無」へ帰ってゆく、という考えが強い。

それに対して、西洋哲学は、例えば、中東の砂漠に生まれたユダヤ・キリスト教を前提にしている。この砂漠の宗教は、絶対的な一つの神を生み出し、この神はすべてを創造し、人

間は、この神に絶対的に服従する。西洋思想のひとつのテーマは、この「神」からの「人」の自立である。そして、もし、「人」が「神」の座を奪えば、「人」は、「神」に代わって、この世界や自然を作り変えることができると考える。こうした考えこそが西洋思想を支えている。西田哲学には、この種の発想はない。それよりも、日本の農耕的風土を基盤にしている、と見ることはできるだろう。

「はみだし感」「はずれ者感」をバネに真理の探究を。

昔の話をして恐縮ですが、私が高校生のころは（もう40年ほど前ですが）、私の育った奈良市には、二、三軒しか本屋もなく、それも小さな本屋でした。高校1年のころから、少し西洋の思想的なものや文学に関心がでてきて、読んでみようと思っても、必ずしも手に入るとは限らなかったのです。だから、まずは間違いなく手にはいる、ドストエフスキーやトルストイやトーマス・マンなどという超有名小説をよく読みました。ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』など、大いに感動したものです。思想書では、ニーチェとかルソーとか、わけもわからないのですが、読んでみました。

こういう風に並べてみるとすぐに気づくように、だいたい、思想家や文学者は、決して平たんで幸せな人生を歩んだ人ではなく、それどころか、たいていは社会からはみ出し、常識からはみ出し、普通の人生からはみだしてしまっています。それぞれ、少なくとも内面では様々な葛藤や苦闘の生を営んでいたのです。

別に「社会や人生からはみ出すことがよい」といっているわけでもありませんし、無理やりはみ出す必要はまったくないのですが、少なくとも人文的なもの、つまり、思想や哲学や文学への関心や感覚は、どこか、「はみだし感」があるものだと思います。そして、誰もが、多かれすくなかれ、この「はみだし感」あるいは「はずれ者感」をもっているものでしょう。特に、高校生や大学生の間は、そうでしょう。ある程度、年をとるとわかりますが、本当にはみ出すことなど簡単にはできません。「はみだし感」を堂々と持てるのは、若者の特権といっていいいでしょう。この特権をうまく行使してください。

ところで、今回のセミナーで取り上げるのは、日本の唯一の哲学者などともいわれる西田幾多郎です。彼は、たいへんに真摯に哲学の課題を考え、人間の生というものと哲学を一致させようとしていました。つまり、哲学のもっとも本質的な問題を理解できれば、それが、人間の人生にとっても大いなる恵みを与えてくれる、ということです。

しかし、彼の人生も彼の哲学も、実に「はみだし感」の強いものです。後年になってたいへんな名声は得ましたが、そもそも名声などに何の関心もなかったでしょうし、それよりも、かなり悲惨な人生を送り、また、誰もまねのできない独特の哲学を作りだしました。

西田哲学は超難解で有名です。主著の『善の研究』はまだわかりやすい方ですが、それでもそうとうに難解です。まず文章が読みにくく、何を書いているのかさっぱりわかりません。今回のこのセミナーで西田を取り上げますが、まずは、この難解さを味わって（覚悟して）ください。何を言いたのか、自分なりに解釈してみてください。

今日、SNSなどを使えば、いくらでも情報や知識が手に入る時代です。それはそれとして、情報的に何かを「知っている」のではなく、自分の頭で考えることで何か「わかる」ということを経験してもらいたいのです。

2018年2月1日制作

編集・制作 公益財団法人国際高等研究所
I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

監 修 池内 了 猪木武徳 佐伯啓思 高橋義人

ISSN 2759-0585



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)